

連載

# 81 在宅医療奮闘記

平成7年より  
在宅を開始した

私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長  
**橋本 満義** (65歳・内科)

## やはり、在宅療養を選択された末期がんの女性

何年前のことだったでしょうか。ある日突然、ご自宅での「がん緩和ケア」についての説明依頼がありました。

当時68歳の女性A子さんは、子宮がん、肝・脳・腹膜転移で全身にがん転移の症状があり、余命3カ月以内といった診断でした。すでに、手術や抗がん剤、その他の積極的な治療ができず、



痛みを除去するだけの緩和ケア病棟へ入院するようすすめられていました。がん専門医に緩和ケア病棟という、入院治療と在宅医療との連携を積極的に視野に入れていただく時代になったようです。

しかし、A子さんは、家族に看取られて人生を全うしたいとのことでした。また、ご自宅での生活療養が可能でしたので、A子さんご家族の意向をくみ、さっそく、国策である、末期がん在宅医療(在宅がん医療総合診療)を24時間365日体制で開始することにしました。同時に、要望があれば再入院も可能であるとお伝えし、安心していただけたのです。

当院では、訪問診療医に国立がんセンター勤務経験者が在職しており、十分な治療と適切な

鎮痛処理(オピオイド使用)なども行えました。初診時の症状は、肉体的・心理的・社会的な痛みとともに、スピリチュアルな痛みも見受けられたのです。ですが、通院ではなく、自宅でご家族の愛情に包まれた生活環境だったからこそ、

今回、国より「保健医療2035」が提言されました。その中でも、健康長寿と末期がん、さらに医療システム進化の文言は、時代の代表となるひとつのキーワードのように思われます。

命に関わる分野で、過去の常識にとらわれず、パラダイムシフトの重要性や大切さは、医療人、生命科学に従事する者として、すでに認知しています。私たちは広く、保健医療のオピニオンリーダーやライフアドバイザーとしても、先頭を走って活躍することを、社会から期待されてもいます。

あらゆる専門家の現在の常識は、時には、未来

最後まで持ちこたえ、満足されたのではないだろうかと思われました。

3カ月を過ぎたころ、緊急往診で訪問すると、そこには眠るように天国へと旅立たれたお姿がありました。合掌

の非常識になります。これもまた、世の常なのでしょう。

さて、私の20年間の在宅医療経験によりますと、患者さんの心は常に、病気に悩み、揺れ動き、終の住処は最期まで決まらないこともあるようです。

### 全人的な痛み (Total Pain)

- ① 肉体的な痛み (physical pain)
- ② 心理的な痛み (psychological pain)
- ③ 社会的な痛み (social pain)
- ④ 文化的な痛み (cultural pain)
- ⑤ スピリチュアル(霊・魂)な痛み (spiritual pain)

## 「お医者さんが来てくれる」

24時間・365日態勢で対応(松山市全域)

私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。



**医師数 21名**  
(常勤6名、非常勤15名)

**内科・外科専門医 18名**  
(国立がんセンター勤務歴有3名)

**精神科専門医 2名**  
**麻酔科専門医 1名**  
(ペインクリニック科)

**末期がん治療(緩和ケア) 相談室開設!**

Hyper Blood Viscosity (高血液粘度群)を科学する **臨床生命科学(体質・病態学、栄養学)研究所開設**  
「地方創生健康長寿研究会」平成27年4月1日発足

機能強化型・有床 在宅療養支援診療所

**(医)東西会 千舟町クリニック**

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788

<http://www.touzaikai.jp/>